

# 病害虫発生予報 第5号(8月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所  
TEL 0736(64)2300

## < 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 縮葉枯病 ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや多 やや多 並 並 並 並 並 並 やや少 並		ミナミキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	やや少 並 やや多 やや少
			カンキツ	黒点病 かしよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ ゴマダラカミキリ	並 やや多 やや少 やや少 やや少 並
			カキ	炭疽病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 やや多 やや少 並
トマト・ミニトマト	黄化葉巻病	やや多	果樹全般	カメムシ類	並
野菜全般	疫病 アブラムシ類 ハダニ類	やや多 並 やや少			

## 気象予報

1か月予報（予報期間 7月25日～8月24日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例:  低い(少ない)     平年並     高い(多い)

	月平均気温 (平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
8月	和歌山 28.1	和歌山 86
	潮岬 26.7	潮岬 233

# I . 水 稲

## 1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は67%（平成25%）、発病株率は12.8%（平成7.8%）であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における7月中下旬の葉いもちの発生ほ場率は38%（平成19%）、発病株率は13.8%（平成3.6%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期に追加防除を行う。
- ② 常発地では次年度から罹病性品種の作付を避ける。
- ③ 7月24日発表の病害虫防除技術情報第3号を参照する。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は17%（平成7%）、発病株率は1.3%（平成2.9%）であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における7月中下旬の発生ほ場率は21%（平成3%）、発病株率は2.3%（平成0.5%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に発病株率が20%以上のほ場では、早急に薬剤防除を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加防除を行う。
- ③ 7月24日発表の病害虫防除技術情報第3号を参照する。

## 3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ② 県北部・中部の普通期栽培における7月中下旬の発病株率は0%（平成0.2%）であった。
- ③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量は並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカの防除を行う。

## 4. ニカメイガ 第2世代（県北部・中部）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部・中部の普通期栽培における7月中下旬の25株あたり被害茎数は0本（平成0本）であった。
- ② フェロモントラップ（紀の川市）の4月1日～7月20日の誘殺数は8頭（平成0.3頭）であった。
- ③ 近年、発生が極めて少ない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代幼虫による心枯茎を認めたほ場では、第1世代成虫の予想発蛾最盛期（平成8月15日頃）から1週間以内に防除を行う。

## 5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中下旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では1.3頭（平成7.7頭）、県北部・中部の普通期栽培では7.5頭（平成14.8頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平成10.1頭）、上富田町0頭（平成0.7頭）、那智勝浦町5頭（平成1.3頭）であった。

## 6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中下旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0.8頭（平成5.5頭）、県北部・中部の普通期栽培では0.5頭（平成5.8頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成3.5頭）、上富田町26頭（平成16.8頭）、那智勝浦町818頭（平成113頭）であった。

## 7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中下旬の発生圃場率は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では83%（平成81%）、県北部・中部の普通期栽培では96%（平成86%）であった。
- ② 7月中下旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では90.8頭（平成53.6頭）、県北部・中部の普通期栽培では27.0頭（平成53.0頭）であった。
- ③ 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市19頭（平成196頭）、上富田町35頭（平成112頭）、那智勝浦町27頭（平成128頭）であった。

## 8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中下旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0頭（平成0.1頭）、県北部・中部の普通期栽培では0.2頭（平成0.3頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成1.9頭）、上富田町0頭（平成0.9頭）、那智勝浦町1頭（平成2.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫5頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

## 9. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中下旬の25株あたりツトム数は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0（平成0.1）、県北部・中部の普通期栽培では0.1（平成0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢期の防除に重点を置く。

## 10. コブノメイガ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① 7月中下旬の25株あたり上位2葉の被害は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0葉（平成6.0葉）、県北部・中部の普通期栽培では0.1葉（平成0.4葉）であった。
  - ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月1日～7月20日の誘殺数は0頭（平成2.0頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 第1世代の発蛾最盛期は7月下旬頃と思われる。
  - ② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾最盛期の7日後）である。
  - ③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

## 11. 斑点米カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 予察灯による7月1日～20日の誘殺数は、上富田町5頭（過去8年の平均6.5頭）、那智勝浦町54頭（平成26.4頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
  - ② イネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までにほ場周辺を除草する。
  - ③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期（出穂10日後）から糊熟期（出穂20日後）に薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期（出穂3日後）に薬剤散布する。

## II. 野 菜

### <トマト・ミニトマト>

#### 1. 黄化葉巻病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は75%（過去2年の平均42%）であった。
  - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 施設栽培のミニトマトやトマトでは育苗ほ、本ほとも施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、ウイルスを保毒したタバココナジラミの侵入を防止する。
  - ② 定期的な薬剤散布に加え定植期の粒剤処理により、感染適期である育苗期から本ほ初期（8～10月）のタバココナジラミ防除を徹底する。

### <野菜全般>

#### 1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は50%（過

去7年の平均7%)であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。

② 降雨前の予防散布に努める。降雨前に散布できなかつた場合は降雨後に早急に防除する。

## 2. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の生息葉率は、ワタアブラムシ2.9%(平成0.2%)、モモアカアブラムシ0%(平成0.1%)であった。

② 黄色水盤(紀の川市)への7月1~20日までの飛来数は15頭(平成16.2頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① モモアカアブラムシ、ワタアブラムシは、薬剤感受性の低下がみられるので、同一系統の薬剤の連用を避ける。

## 3. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率および生息葉率は、カンザワハダニでそれぞれ14%(平成30%)、2.1%(平成9.7%)、ナミハダニでそれぞれ0%(平成13%)、0%(平成1.9%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性が発達している事例が多いので、同一系統の薬剤の連用を避ける。

## 4. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率は0%(平成:発生ほ場率28%、生息葉率5.2%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ナスでは、収穫果実の選別時に被害を認めたら防除を始める。

② 施設では、栽培終了後に7~10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

## 5. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率は0%(平成:発生ほ場率1.8%、生息葉率0.1%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は4~5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

② 施設では、栽培終了後に7~10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

## 6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率は14%(平成5%)、生息葉率0.7%(平成0.2%)であった。

- ② フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市54頭（平年21.4頭）、和歌山市115頭（過去4年の平均97.4頭）、御坊市250頭（平年134.9頭）、印南町12頭（平年53.9頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。
  - ② 抑制エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

## 7. シロイチモジヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ① フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平年7.9頭）、御坊市13頭（平年71.3頭）、印南町0頭（平年81.6頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① ハスモンヨトウに準ずる。

## Ⅲ. 果 樹

### <カンキツ>

#### 1. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は25%（平年38%）、発病度は1.3（平年1.8）であった。
  - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 秋雨時期における後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。
  - ② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。
  - ③ 過乾燥等で樹勢が低下すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

#### 2. かいよう病

- (1) 予報内容 果実発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の春葉病斑の発生園率は42%（平年29%）、発病葉率は0.9%（平年3.7%）であった。
  - ② 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 防風対策に努め、台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。
  - ② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除も徹底する。
  - ③ 7月31日発表の病害虫防除技術情報（第4号）を参照する。

#### 3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は17%（平年38%）、発生葉率は2.2%（平年10.5%）、100葉

あたり雌成虫数は3頭（平年33頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。

#### 4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期 第2世代2齢幼虫最盛期 8月11～15日（平年よりやや早い）  
発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除区、有田川町奥）での第1世代成虫の初発時期は平年よりやや早かった。
- ② 県予察ほ場、各地域とも第1世代幼虫の発生量は平年よりやや少なかった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生園では8月中旬に、散布むらがなく葉裏までかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

#### 5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の被害園率は34%（平年16%）、発生園率は0%（平年13.1%）であった。
- ② 県予察ほ場（無防除区、由良町）における黄色粘着トラップによる7月16～20日の誘殺数は37頭（平年134頭）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生活長調査の結果により、適期防除に努める。
- ② 発生園およびイヌマキやサンゴジュの隣接園では防除を徹底する。

#### 6. ゴマダラカミキリ

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発は平年よりやや早かったが、6～7月の発生量は平年並であった。
- ② 発生源となる放任園や管理不良園が増加している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 成虫の捕殺に努め、放任園周辺など発生の多い園では、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬剤を主幹から株元に散布する。

### <カ キ>

#### 1. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発病果率は「富有」0.1%（平年0.1%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年0%）であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
- ② 台風が接近する場合は事前に薬剤を散布する。散布できなかった園は台

風通過後速やかに散布する。

- ③ 密植園や風通しの悪い場所は発病しやすいので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

## 2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発生園率は「富有」88%（平成69%）、「平核無」・「刀根早生」35%（平成36%）であった。
- ② 県北部における7月中旬の発病葉率は「富有」8.4%（平成12.0%）、「平核無」・「刀根早生」2.6%（平成2.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。
- ② 一般に盛夏期の発病は一時休止するが、山間部や風通しの悪い園地は発病を繰り返しやすいので、これらの園地では秋雨前の予防散布に努める。

## 3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における前年10月の「富有」での発生園率は47%（平成30%）、発病葉率は5.2%（平成4.2%）であった。
- ② 前年10月以降、巡回調査園以外で多発および早期落葉した園がみられた。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。
- ② 子のう胞子が飛散する8月上旬まで防除が必要である。

## 4. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における前年10月の「富有」での発生園率は47%（平成84%）、発病葉率は3.2%（平成22.5%）であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。
- ② 本病は7月頃から発病し二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

## 5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発生園率は、「富有」65%（平成80%）、「平核無」・「刀根早生」12%（平成34%）であった。
- ② 県北部における7月中旬の寄生果率は、「富有」5.3%（平成12.0%）、「平核無」・「刀根早生」0.9%（平成2.3%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 県予察ほ場（無防除区、紀の川市粉河）における第2世代ふ化幼虫の初発は7月21～27日の間であった。このことから、次の防除適期は8月上旬と考えられる。
- ② 枝葉の混み合いをなくし、薬剤が果実に十分かかるよう丁寧に散布する。



## < 果樹全般 >

### 1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による7月中旬のチャバネアオカメムシ越冬成虫の誘殺数は、紀の川市粉河で192頭（平年198.8頭）、有田川町奥で193頭、みなべ町東本庄で662頭（過去5年の平均612.8頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。
- ② 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

**○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/  
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

**○和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。